

質的研究の基礎と考え方 (2)

高木廣文

(東邦大学医学部看護学科国際保健看護学研究室)

key words 質的研究, 現象学, グラウンデッド・セオリー・アプローチ, 構造構成主義, 構造主義科学論

■ 研究対象の選びかたとデータの測定

量的研究においては, 調査に先立って特定の事象の把握の方法, すなわち測定方法を設定するのが普通である. このような操作は, 「プレコーディング (pre-coding)」とよばれることがある. しかし, 質問への回答を限定できない場合や, より自由度の大きい回答を得たい場合には, 質問への回答を対象者に自由に記載させ, 調査後, 回答をみて, 研究者がカテゴリ化を行う場合もある. これは, 「ポストコーディング (post-coding)」とよばれている. ただし, ポストコーディングは, データをある程度みてから決めねばならないので, 「後知恵」であるとされ, あまり好ましい方法とは考えられていない. いずれにしろ, 量的研究でデータとして使用するためには, コード化が不可欠である.

一方, 質的研究においては, 写真, 絵, 映画等ほとんどあらゆるものがデータになりうる¹⁾. しかし, 最終的にデータは, 言語情報としてテキスト化され収集される. このように言語がそのまま分析に用いられる点が, 量的研究とは大きく異なっている.

量的研究の多くは, 統計学的仮説検証的な研究が多いため, 標本は無作為抽出が基本となる. もしくは, 新薬の開発や新しい術式の比較等のため

には, 対象者の無作為割付が要求される. さらに, 統計学的検定では, 標本数が大きいほど検定効率が高くなるので, 比較的多数の標本数が必要となる.

一方, 質的研究では, 情報提供者の個性や多様性を重視する立場であり, 研究に必要とされるケースを選ぶべきなので, その選択方法として無作為抽出することはまれである. 研究目的にもよるが, 1例から始められる. モデル構築等の必要に応じて, 理論的サンプリング (モデル構築に必要と考えられる特性をもつサンプルを任意に選んで調査する) 等も行われる²⁻⁴⁾.

■ データ解析／解釈方法

標本データから母集団に関する一般化・普遍化を目指す量的研究では, 統計学的推定・検定の各種方法が多用され, 方法論としては確立されたものになっている.

一方, 質的研究では方法が多数あり, その解釈方法は必ずしも統一された見解があるとは言えないのが現状である. 多様な質的研究の方法が存在し, ケース研究にはケース研究の解釈方法があり, ナラティブアプローチにはナラティブアプローチの解釈方法があるように, 各方法に適した解釈方法が採用されている.

しかし, 質的研究に統一的なデータ解釈法が全くないというわけではない. 極めて論理的なデー

タ解釈方法として、グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)がある。GTAは、特定の現象に対する理論構築が量的研究ではうまくできないという限界を克服するために考案されたという経緯がある⁵⁾。

GTAでは、収集した情報である言語テキストを切片化(意味内容が同一である小部分に区分する)、コード化(名前, ラベルを付ける)、カテゴリ化、概念化(類似した意味内容のコードをまとめる)、コア概念(理論の中心となるカテゴリ)の抽出、そして可能ならばモデル構築を行うというプロセスをとる⁶⁾。このようにGTAのデータ解釈プロセスは、他の質的研究の方法論としても有効な方法ではないかと考えられる。

抽出された重要なカテゴリや概念に関しては、理論的飽和(それ以上、新しい概念やカテゴリを見つけていくことができない状態)に達するまで標本抽出を行えば、主観的な解釈もかなり客観性をもつものになると考えてよいだろう。

コード化や概念化を行い、さらに理論構築を行う場合、データのなかから何が重要かを認識し、それに意味を与える能力である研究者の「感受性」が重要とされている⁷⁾。この点に関しては、前回に述べたように研究者の認識構造が情報提供者と同型であるかということが、データの解釈に大きく影響するので、経験や知識の豊富さがデータ解釈に影響するものと考えてよいだろう。

質的研究は、このデータ解釈が主観的であるという批判を、量的研究者から受けやすい。このような批判が質的研究に対する無理解から発せられているという部分もあるのだが、質的研究者の説明不足もその一因であろう。このような批判に対しては、データ解釈の信憑性を高めるために、第三者や専門家の意見を聞いたり、対象者に解釈結果をフィードバックしたりするなど、反省のプロセスを研究に組み込むことが重要であろう。

また、いくつかの手法を組み合わせたり、量的研究と質的研究の手法を組み合わせたりするトライアンギュレーションの方法は、一方の研究形態を相補的に補完するのに有効であり⁸⁾、質的研究の「質」を高めるのに考慮すべき方法と考えられる。

いずれにしろ、データ解釈のプロセスを明示することは、質的研究の信憑性を高めるには、極めて有用である。

■結果の一般化

表に量的研究と質的研究の比較をまとめて示した。量的か質的かは、本質的には研究目的となる現象に関する認識論の相違に起因する。しかし、方法論からは、解析／解釈すべきデータが数量的か言語的にあるといえる。

量的研究では、データ解析に統計学を使用するため、コンピュータに大きく依存している。このため、同一のデータを解析した場合、研究者による結論の相違は小さいものと考えられる。なぜならば、得られた結果の解釈は、通常は統計学的検定の有意性をもとになされるので、誰が分析しても大差のない結論に到達できるはずである。このため、理論的な飛躍やブレイクスルーはあまり望めないが、その科学性に対して批判を受けることも少なくなる。

一方、質的研究では、コンピュータを利用することもあるが、最終的には研究者自身の頭脳がコード化、カテゴリ化、概念化等のデータ解釈を行うことになる。したがって、質的研究の結果は、研究者の認識構造の資質や能力に大きく依存せざるを得ない。この点から研究の良否は研究者自身にかかっているといえる。逆に、この点をとらえて、質的研究は主観的であるとか、科学的ではないという批判が起こりやすい。

多くの質的研究では結果の一般化や普遍化を要求しないので、標本は任意で構わないことになる。Yinは結果の普遍化の方法として、質的研究の結果から得られる理論を拡張する「分析的な一般化(analytic generalization)」と、母集団のサンプルから得られる結果からの母集団特性の推論を行う「統計的な一般化(statistical generalization)」を区別する必要があることを指摘している⁹⁾。このように、質的研究のサンプルは、母集団を代表するサンプルではないのが普通なので、統計学的な論理を質的研究に持ち込んで評価することに、方法論的な妥当性はありえない。

■表 量的研究と質的研究の比較

	量的研究	質的研究
現象に対する認識	集団における傾向性への興味、仮説に基づく検証の研究等。実証主義的、構造主義的認識。	情報提供者の個人的経験、現象の多様性の前提。個人の認識や経験についての哲学的な仮定等。社会構成主義、象徴的相互作用論、現象学的認識等。
研究対象	数量化もしくはコード化可能なあらゆる現象。主に外部世界。	言語化可能なあらゆる現象。主に内部世界。
研究目的	主に研究仮説の検証、推定。観察事象の一般化。	現象の記述、再構築。行為の意味の解釈、理解、モデル構築。その他、研究課題に依存。
データ収集法	実験、調査、観察。質問紙調査が多用される。	調査と観察が基本だが、実験でもよい。半構造化面接が多用される。
研究対象者数	一般化のためには多いほどよい。通常は、一度に収集。	1例以上。必要に応じて追加可能。
研究対象の選択	主に無作為抽出。無作為割付が望ましい。	任意抽出が普通。データ解釈の進展に応じて、理論的サンプリングを行うこともある。
データ解析／解釈用のデータ	特定事象について、コード化、カテゴリー化されたもの。文字でもよいが、一般には数値。	絵、写真等、なんでもよいが、最終的には、言語化されたテキスト。
データ解析／解釈の方法	統計学の各手法。特に検定、推定の各種法が中心だが、複雑な現象記述のためには多変量解析も有用。	主にコード化、カテゴリー化、中核概念の抽出等。研究課題に応じた解釈法の採用。
データ解析／解釈のツール	主にコンピュータで解析用ソフトを使用。	研究者自身の頭脳とその認識構造。
結果の解釈	主に統計学的検定の有意性等をもとに言語化して解釈。	データ解釈時に同時に行う。アブダクションが必要。
エビデンスの水準	標本抽出または処理の割付の無作為化の程度に依存する。	研究の信憑性を高めるようなプロセスの存在の程度に依存。トライアンギュレーションの実施の有無とその内容にもよる。

前回述べたように、質的研究では研究者と情報提供者の認識構造の同型性を暗黙の前提としている。これは、ある現象に関して社会における認識構造は同一であることを仮定していることになる。また、池田(1998)が指摘するように、データに基づく帰納法では「一回起性の出来事には、あらかじめ共通な事実が含まれている」という前提がある¹⁰⁾。これらの点から、質的研究の結果は、うまく現象を記述できていれば、社会的に共通する事実としての一般性をもっていることになる。ただし、ある現象のモデル化や一般理論の構築では、推論の一形態ではあるが、飛躍を伴うアブダクション(跳躍的な発想)も必要となってくるかもしれない¹¹⁾。

質的研究の結果の一般性を高めるためには、理論的飽和や理論的サンプリング等の手続きを適切に行うことが必要とされよう。質的研究のデータ解釈のプロセスは、主観的ではあるが、一定水準以上の能力をもつ研究者ならば、ほぼ似たような

結論に達するのではないだろうか。それでも、研究方法論としての研究は、現状では十分ではないように思われるので、今後の検討が必要な領域だと考えられる。

■量的研究と質的研究の相互理解

「医学はサイエンスでありアートである」とよくいわれる。この場合、サイエンスは医学の基礎となる科学的な知であり、エビデンスを意味する。一方、実際の臨床での技術的な側面はアートとして表現されている。当然、サイエンスとアートは対立する概念ではなく、車の両輪のように相補的なものとして考えるべきである。しかし、実際にはサイエンスを客観的、アートを主観的なものとしてとらえると、多くの場合に対立する概念になってしまう。さらに、客観的なのは量的研究、主観的なのは質的研究という構図が生まれる。この

ような構図は、たとえば基礎と臨床、個人と集団、任意抽出と無作為抽出など、さまざまなレベルでの対立関係が生じてくるだろう。このような対立関係の構図は好ましいものではない。それでは、量的方法と質的方法の対立関係を、相補的關係として認識するためには、どうすればよいだろうか。

そもそも哲学的問題であった主観—客観問題のような信念対立が、実際の医学研究現場でも、質的研究と量的研究の相互無理解の対立問題としてすでに存在している。この問題を棚上げにして、形式的な研究方法論の議論や実際の研究を行うことは、無用な混乱を起こす可能性が高い。

西條(2005)は、研究における信念対立の問題を構造構成主義の立場から、関心相関的に研究手法を選ぶことで、解決可能であるとしている^{12, 13)}。すなわち、簡単にいえば研究目的に応じて、最も適した研究方法や分析方法を柔軟に選べばよいのである。

構造構成主義による信念対立問題の解消は、極

めて魅力的に思えるので、今後の医療分野での研究法の展開に有効であろう。また、質的研究で重要な役割をもつ中核概念の発見に結びつくような発想についても、関心相関的なアナロジーにより可能であることを示唆している^{13, 14)}。

ただし、構造構成主義は後期フッサールの現象学、構造主義科学論等の背景から生まれているために、量的研究を主として行っている研究者に、そのような概念枠組みが簡単に理解できるわけではない。また理解できても、すぐに納得できるわけでもないだろう。このような状況を放置したままでは、せっかく質的研究を行う研究者が増えたとしても、信念対立の問題は深刻になる可能性が高い。

信念対立による量的研究と質的研究の相互不信は、どちらにせよ払拭すべきもののなので、質的研究の方法論の普及と広範な実践とともに、この種の議論が活発に今後行われるべきだろう。

(おわり)

文 献

- 1) Flick U : Qualitative Forschung, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, 1995 (小田博志・他訳：質的研究入門—<人間科学>のための方法論, 春秋社, 2002, pp170-197).
- 2) Glaser B, Strauss AL : The Discovery of Grounded Theory : Strategies for Qualitative Research, Adline Pub Co, 1967 (後藤 隆・他訳：データ対話型理論の発見, 新曜社, 1996, pp64-112).
- 3) Flick U : Qualitative Forschung, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, 1995 (小田博志・他訳：質的研究入門—<人間科学>のための方法論, 春秋社, 2002, pp249-268).
- 4) 戈木クレイグヒル滋子：グランデッド・セオリー・アプローチ—理論を生みだすまで, 新曜社, 2006, pp139-144.
- 5) Glaser B, Strauss AL : The Discovery of Grounded Theory : Strategies for Qualitative Research, Adline Pub Co, 1967 (後藤 隆・他訳：データ対話型理論の発見, 新曜社, 1996, pp1-26).
- 6) 戈木クレイグヒル滋子：グランデッド・セオリー・アプローチ—理論を生みだすまで, 新曜社, 2006, pp27-41.
- 7) Strauss A, Corbin J : Basics of Qualitative Research—Grounded Theory Procedure and Techniques, 2nd ed, Sage Pub Inc, 1998 (南 裕子監修, 操 華子, 森岡 崇訳：質的研究の基礎 第2版—グラウンデッド・セオリーの技法と手順, 医学書院, 2004, pp47-69).
- 8) Flick U : Qualitative Forschung, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, 1995 (小田博志・他訳：質的研究入門—<人間科学>のための方法論, 春秋社, 2002, pp323-332).
- 9) Yin RK : Case Study Research, 2nd ed, Sage Publications, Inc, 1994 (近藤公彦訳：ケーススタディの方法 第2版, 千倉書房, 1996, pp43-53).
- 10) 池田清彦：構造主義科学論の冒険, 講談社, 1998, pp31-34.
- 11) 戈木クレイグヒル滋子：グランデッド・セオリー・アプローチ—理論を生みだすまで, 新曜社, 2006, pp117-118.
- 12) 西條剛央：構造構成主義とは何か—一次世代人間科学の原理, 北大路書房, 2005, pp51-81.
- 13) 西條剛央：質的研究論文執筆の一般技法—関心相関的構成法, 質的心理研 4 : 186-200, 2005.
- 14) 西條剛央：構造構成主義とは何か—一次世代人間科学の原理, 北大路書房, 2005, pp163-169.